

NPO 法人アサーティブジャパン第5回通常総会・特別講演

# 女性と起業とエンパワメント

## ～20年前にアサーティブネスに出会って～

人材育成コンサルタント 大塚朋子さん

さる5月23日に2009年度第5回通常総会をアサーティブジャパン研修室にて開催いたしました。総会終了後に特別講演として、女性のエンパワメント事業に積極的にかかわってきた人材育成コンサルタントの大塚朋子さんに「女性と起業とエンパワメント」というタイトルで講演していただきました。

今回の講演をお願いした大塚さんは、1997年に森田汐生（アサーティブジャパン代表理事）が初めて横浜女性フォーラムで講演を行ったときのコーディネーターであり、また男女共同参画センターにアサーティブネスの概念を導入してくださった最初の人でもあります。今回は当日のお話をもとに、その一部を編集部でまとめ、掲載させていただきます。

プロフィール：おもに女性の仕事、起業支援、地域再評価と有機農業などに取り組む人材育成コンサルタント。30歳の時に再就職、地域新聞記者、編集者。その後、横浜市・女性フォーラム（現男女共同参画センター）にて国際協力、総合相談、事業企画のコーディネーター。JICA ジェンダー専門家としてフィリピン女性支援プロジェクトリーダーなどの職歴を経て現在に至る。



アサーティブジャパンの総会という大事な場で話をする機会をいただき、大変光栄です。

私はかなり早い時期、今をさかのぼること20年以上も前に森田汐生さんにお会いし、アサーティブネスについて知る機会があった、いま思えば大変ラッキーなひとりではないかと思っています。

現在までかれこれ30数年、仕事をしてきました。「女性・ジェンダー」「起業」「エンパワメント」、この3つのキーワードは70年代から現在に至るまで社会的にも重要なテーマであり、私個人にとっても大きなテーマです。社会と個人がコインの裏表のように相互に関わりをもつなかで、私自身も自分のライフスタイル作ってきました。そのあたりの話をして皆さんのお役に立てればと思っています。

### 女性たちのムーブメントに刺激されて

まず個人的なことでは30歳のときに初めの転機がありました。結婚して出産し、それまでの仕事を辞

めて、家でできるようなフリーライターの仕事をしていたのですが、どうも居心地がよくない。働きたくても当時、保育園は大変な定員オーバーで入れない。もんもんとしていましたが、30歳を前に、どうもこれじゃいかん、と仕事探しを始めました。というのも、ちゃんと一人前に稼いでない、夫のほうが主たる稼ぎ手というのが、かなり居心地が悪かったんですね。

ちょうどその当時は、1970年代の半ばでしたから、新聞や雑誌では世界の各地で女性たちの運動が始まっていると報道していました。あのウーマンリブで



す。1975年からの「国連婦人の10年」、80年のコペンハーゲン、85年ナイロビの国連女性会議へと。このような流れを機に、女性たちのムーブメントが世界的に始まっている。これは大変刺激的でした。周囲にいた仲間たちとも「自分たち女性をとりまく状況をなんとか変えなくては」と模索していた時期でしたから、海外ばかりでなく国内でも始まった女性たちの運動にとっても共鳴しました。



## 女性も自分の思いを貫いてもいい

そこで私自身も、特に、経済的な自立をしたい、これこそが第一歩と思って、いろいろ仕事を探した結果、ラッキーなことに地域新聞社に就職することができました。仕事の内容は、取材して、写真も撮って、記事を書く、というものでした。

取材対象は当時、社会に進出し、活躍している働く女性を中心に取材するというもので、自分自身のことも含めて関心のあるテーマで仕事ことができました。それがきっかけでたくさんの働く女性たちとの出会いがあり、その一環で、当時学生だった汐生さんにも出会い、アサーティブネスを少しだけ知ることができたわけです。

いま振り返ってみても、あのとき「経済的自立」というのを自分に課してよかったと思っています。もちろんそうじゃない道を選んだ人たちもたくさんいて、満足な人生を送っていらっしゃると思いますが、私自身のことでいえば、やっぱりあの時に経済的自立の道を選択してよかった。仕事もしたい、子育てもしたい、家庭生活も楽しみたい、こういうことが非常に「欲張り」で「わがままだ」といわれた時代で、それまでは何かを諦めないといけなかった。あれもやりたい、これもやりたい、と自己主張してきた人が少なかったということでしょう。

世界で起きている女性たちの行動は私にとって、「何も諦めなくていい」「女性も自分の思いを貫いてもいい」という強力なメッセージだったのです。

## 40代で迎えたターニングポイント

40代に入ると仕事もおもしろくなり、ある程度の

収入も確保できてくるようになってきました。それに加え自分の時間もほしいということになってきて、つれあいとの過ごし方についても考えるようになりました。

一緒にはいたいけれど、24時間全部を一緒にいなくてもいいのではないかと、新しい関わり方があるのではないかと。しかし、相手にはなかなか通じず、結局、悩んだ末に離婚を選択しました。

仕事では小さな会社で仕事していましたので、組織的な葛藤や既存の枠にいつまでも自分がおさまっていることへの<sup>きつ</sup>窮屈感もあって、40歳を過ぎたときには仕事も住まいも大きく変え、一人暮らしに踏み切りました。2年半ほどロンドンに行き、日本語教師などやりながら、いまえば充電期間でした。

## 女性フォーラムでアサーティブネスの講座を企画実施

40代半ばのとき、当時の横浜女性フォーラムから仕事のお話をいただき、もう一度再就職の機会を得ました。それから10年間このフォーラムで、国際交流、総合相談、事業企画などを担当しました。相談事業のなかでは、汐生さんによるアサーティブネスの講座や出版を企画し、それがのちのアサーティブネスの「ブレイク」につながった、多分そうではないかと思っています（笑）。

出版した『ことばに出そう、自分の気持ち ～アサーティブトレーニングのすすめ～』これは小さな本でしたが、本当にコンパクトによく出来ていました。増刷、増刷で5～6刷<sup>す</sup>りはいったのではないのでしょうか。一緒に企画したスタッフが大変熱心でしたし、汐生さんと組んでいい仕事ができたとって

## NPO 法人アサーティブジャパン第5回通常総会・特別講演

います。

この本の校正段階では、実は私は夏休暇でアフリカにいる友人に会いに行き、あわせて現地の女性の調査などを個人的にやっていましたが、その地まで横浜から校正用のファックスが届いたりしたので、そういう点からも思い出深い一冊になりました。

こうして、とても早い時期から汐生さんとアサーティブネスを知ることができたのは、いまでは自慢できることではないでしょうか。でも、それと自分がちゃんとアサーティブにふえるまえていのかどうかは、また別の話しですが…（笑）。

## エンパワメントという力強い言葉

“エンパワメント”という言葉を知ったのは95年の北京・世界女性会議の時でした。それ以降、日本でもエンパワメントという言葉が広まりました。私自身も事業を企画していくとき、この言葉をたくさん使い、エンパワメント事業というのを立ち上げていきました。女性・ジェンダーの問題解決となるキーワードだったわけです。

難しいことは抜きにして、エンパワメントとは、「人の潜在的な能力の発揮が可能になるように、それを阻害しているものを取り除くこと」だと。

たとえば途上国などの貧困の状況におかれている人たちは、貧しくて力がなくはなく、それぞれみんな潜在的な力を持っている。しかし貧困という



ものが、そして社会の仕組みというものが、こうした人たちの潜在的な力を抑圧している、だからそれを取り除くことだ、と。これは目からうろこでした。

私は特に「経済的エンパワメント」という考え方に励まされて、エンパワメントされたほうだと思っています。エンパワメントとは「力をつける」とか「力を伸ばす」とかいろいろな使い方をされています。あるいは、「権限を取る」という、抑圧の力を取り除く革命的なものとしても使われてきました。

たぶん、アサーティブネスも60年代～70年代のアメリカでは、“権利を獲得するための力”、“理不尽な社会の仕組みを是正するための力をつけること”として、かなりパワフルに機能したのではないかと考えています。

## フィリピン女性のチャレンジをサポート

50代半ばでは再度転職を決断しました。JICA（国際協力機構）が新たな女性支援プロジェクトを立ち上げるのに、特に女性センターなどでの仕事経験者を募っていたからです。10年ほど仕事をしてきた女性センターですから、大変去りがたかったのですが、転職というものを自分で作っていくこともまた必要かと考え、2003年から3年9か月ほど、フィリピン・マニラに赴任しました。

フィリピンでは現地のスタッフとさまざまな事業をしていきましたが、特に女性のための起業支援に力をいれ、女性たちのチャレンジをサポートしてきました。

フィリピンから日本に戻ってきて、ものごとが進むスピードの違いや、気候の違い、それに合わせてちょうど定年の時期だったということもあり、はじめの1年は“社会復帰”に時間がかかりました。

そうこうしているうちに、私の友人が定年で田舎に帰って農業をやりたいということで、「これは！」と思い、定年帰農者と田舎再活性プロジェクトといった名前で勝手にプロジェクトを立ち上げました（笑）。それから1年近くたつのですが、住まいのある鎌倉

と茨城県にあるその農地とを行ったり来たりの二重生活を、結構楽しんでます。

## 農村部の女性とアサーティブネス

農家の女性たちとも少しずつ友だち付き合いをさせてもらっています。みなさん、直売所や道の駅で農産物や漬物などの加工品を販売しており、非常に働き者が力があります。

ただ気になったのは、農水省のある男女共同参画の調査をみていたら、こうした女性たちのなかで「JA農協の役員などには付きたくない」という人が7割。理由は自分のところの農業が忙しいからです。

大きな農家になればなるほど、日常食品の自給率は高く、お味噌、漬物、ジャム、お餅、などなど、多くの加工品も自家製またはグループなどで共同生産しています。ほとんどが機械化していてもそれ以外の作業は手作業で、広い庭に季節の花が絶えず、日常家事や子供、孫の世話、とにかく全部やるわけです。さらにそこに加えて社会参画するとなると、これはもうスーパーウーマンです。

その調査では、男性はあまり男女共同参画には反対していません。「お母ちゃんががんばってすごいいね」と言われるだけで、夫側がその分、家事などの分担が増えるわけではないからです。彼女たちがこのままスーパーウーマンとして仮にやっていけても、次の世代はできないのではないかと、思っています。つまり、農村部に若い女性が来ないということです。

こうした農家の女性たちにこそアサーティブネスが必要ではないかと思っています。アサーティブネスは都市型のライフスタイルの方たちへは比較的浸透しやすい考え方だと思います。

一方、従来型の農村社会の中で、こうした“自分も相手も尊重するコミュニケーション”を広めていくのは非常に困難です。そこにどう伝えていくのがこれからの課題ではないでしょうか。



## 今までの経験を活かして社会的起業を試行中

この田舎再活性プロジェクトですが、これを今度は私の起業の機会ととらえています。1年間のプロジェクトとしての試行を踏まえて、いま合同会社の設立準備をしているところです。

この起業のコンセプトとしては、有機野菜を生産して地域に有機農業への理解を広めることと、配送する野菜1箱につき100円を途上国の子どもたちの就学支援にあてるというものです。私たちの野菜を食べれば食べるほど、少しずつですが貧しい地域の子どもの教育機会が増える。このような社会的起業のビジネスモデルを模索していきたいと考えています。

こうして30数年仕事をしてきて、いま60歳をすぎました。年齢を重ねていくと、口のほうは動けられどなかなか体のほうは動きが鈍くなってきました。そこで最近は、言ったらやる、やらないことは言わない、と「有言実行」の初心に立とうと思っているところです。

若い世代の方たちには、ときどき、自分のやってきたことと社会が抱えているテーマをすり合わせながら、次は何をしていくかとプランを立てライフスタイルを築いていってほしいと思います。

大塚朋子さんのホームページはこちら  
<http://www.one-apple.com>